

## 自己評価報告書

平成23年 5月11日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20520409

研究課題名(和文)

日本語動詞の形容詞的用法の獲得過程に関する通史的研究

研究課題名(英文)

Historical Study about the process of gaining the participial usage of verbs in Japanese

研究代表者

釘貫 亨 (KUGINUKI TORU)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：50153268

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：分詞、テンス、アスペクト、

## 1. 研究計画の概要

古代語の分詞的用法の採集と分類によってタリの排他的優勢を論証し、中世以後の過去辞のタリ一極収束の原因を突き止める。万葉集に代表される奈良時代語資料においてキ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リの過去辞の中で分詞用法に組織的に介入できるのはタリだけであった。平安時代以後上記の過去辞が全体的に分詞用法に介入できるようになった。しかし、タリが過去分詞用法に単体で介入するという顕著な性格を持つものに対して、テンス形式であるキ・ケリが分詞用法に介入する場合「アリケル、ナリケル、ザリケル、カリケル」のごときアスペクト諸形態と共起する傾向が強く、単体での分詞用法の増産が抑制されていた。リは、文脈から項を引きこむ性格が前代に引き続いて濃厚であるが分詞用法もある程度進出し、上代からある無標識分詞(咲く花)、現在分詞(咲ける花)、過去分詞(咲きたる花)のユニークな鼎立関係が確立した。また、古代語では分詞に転用される動詞は自動詞に偏っていたが、平安時代以後漢文訓読の影響で受け身助辞を導入させて「殺されたる人」のように自動詞に転用する表現が開発され、その際にもタリ介入例が圧倒的優位を占めた。古代語における分詞用法に介入する過去辞の中でのタリ単体介入例の優勢が、中世以後の過去辞における「タ(ダ)」一極収束の原因になったことを展望し、論証する。

## 2. 研究の進捗状況

奈良・平安時代語における分詞用法のタリの排他的優勢を論証した。万葉集では複数あ

る過去辞の中でタリだけが過去分枝としての機能を持っていたことを論証した。完了辞りは、文脈から項を引きこむ性格が濃厚で分詞を構成せず、タリ、リの区別は現代語でいえばタとテイルの区別に相当する。平安時代にタリ以外の過去辞も分詞用法に進出した。その実態は、タリが単体で、キ・ケリがアスペクト形態と共起して分詞用法を構成することが判明した。資料的には、上代が万葉集、平安時代は、三代集と10世紀前後の主要な散文文芸を用いた。顕著な業績として日本語の分詞構造の複雑なこと、特に無標識・過去・現在の鼎立関係が欧語と著しい対照をなすことを見出した。

## 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

## 【理由】

資料の重点を古代語の和文資料(ひらがな文芸作品)に特化した点が奏功して、当初は予期しなかった無標識・現在・過去からなる分詞鼎立を発見することにつながった。

また動詞自他対応を核にして歴史的に拡張した日本語ヴォイスの歴史的成立過程を明らかにすることができたが、この実態が中世語の名詞修飾の位置におけるタリの圧倒的優勢の呼び水になったことをタリ一極収束の一つの可能性条件として提案した。

## 4. 今後の研究の推進方策

上記1、2の達成を学会で周知させるとともに、中世以後のタリ収束の原因追求の展望を得る。当初の目標は、中世以後のタリ収束の要因追求であったが、日本語の分詞鼎立と

いう副産物を得た。この成果は、意義深いものであり、当初の目標と併せて日本語分詞の全体像解明も新しい解明課題となるであろう。この成果を速やかに査読付きの学会誌に掲載し、学会周知化を図る。日本語の分詞構造は、1, 2で明らかにした過去、現在分詞のみならず、無標識分詞を基点に、受け身、未来、当為、予想など多様な様相を呈することが考えられる。現代語を含めた日本語の分詞構造の全貌解明のための構想を残りの研究期間内に獲得することが目標である。合わせて当初の目標であるタリ収束の論理構造を解明する。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

1 釘貫亨「日本語ヴォイスの歴史的成立と展開について」『日本語テキストの歴史的軌跡』(名古屋大学グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」第8回国際研究集会報告書、名古屋大学大学院文学研究科、2010、3、査読無)

2 釘貫亨「『源氏物語』における過去分詞的名詞修飾一典型」『HERSETEC』VOL. 2 (名古屋大学グローバルCOEプログラム論文集2、名古屋大学2009、3、査読無)

[学会発表] (計2件)

1 釘貫亨「平安時代語における過去辞が介入する名詞修飾の特徴」日本語学会平成20度秋季大会(2009年11月1日)

2 釘貫亨「日本語ヴォイスの歴史的成立と展開について」名古屋大学GCOEプログラム国際研究集会(2009年9月5日、カレル大学、プラハ、チェコ共和国)